

### 六月の法座・行事

十一日・同朋の会例会(午後三時)  
 大阪教区第七組  
 教應寺住職 建部 智宏 師  
 長教寺住職 稲垣 洋信 師

十二日・闍如上人御逮夜・常永代経(午後二時)

十三日・闍如上人御命日(午前八時)

十八日・存如上人御祥月御命日(午前八時)

二十三日・二十四日  
 ・夏の御文法要  
 京都教区山城第五組  
 正蓮寺住職 平原 晃宗 師  
 (午後一時半)

二十四日・正信傷書写の会(午前十時)

二十七日・宗祖聖人御逮夜(午後二時)

二十八日・宗祖聖人御命日(午前八時)

※今月の定例法話は夏の御文法要勤修の為お休みです。

### ◆ようこそお参り

### くださいました

去る五月十七日、京都教区近江第二組坊守会様がお参りに来られました。輪番の挨拶の後、別院の由緒と沿革の説明があり、その後、展示している六字城の額と戦前の本堂の大きさを垣間見ることのできる上卓と蓮台を見学されました。

### 弥陀の回向成就して

### 往相・還相

ふたつなり

(法語カレンダーより)

### 編集後記

今、天満別院ではホームページ作りに取り組んでおります。一人でも多くの方に天満別院について知っていただければ幸いです。完成までもうしばらくお待ちください。

堀河

霊園・墓石



### 株式会社 太田石材店

本社 〒536-0001 大阪市城東区古市1丁目23番20号  
 本店 〒530-0042 大阪市北区天満橋1丁目2番18  
 TEL 06-6930-5075  
 0120-30-5075  
 FAX 06-6930-5078

# 六字城

発行 真宗大谷派(東本願寺)天満別院

大阪市北区東天満一-八-二六

電話 六三五一-三五三五  
 代表者 輪番 長谷山法雄

### 「和讃のおはなし」

真宗大谷派 鍵役  
 宣心院 大谷 暢文

『現世利益和讃(一一)』

山家の伝教大師は

国土人民をあはれみて

七難消滅の誦文には

南無阿弥陀佛をとなふべし

(天台宗比叡山の伝教大師・最澄上人は、この国の人民すべてを哀れみなさつて、七難消滅の誦文として、南無阿弥陀佛を称えよとお教えくださいました。)

伝教大師・最澄上人は、比叡山延暦寺をお開きになった方です。最澄上人は、延暦二十三年(八〇四)年、弘法大師・空海上人とともに、当時の中国・唐の国に留学され、円教、密教、禅、戒律の四宗を日本に請来されました。四宗のうちの円教とは天台法華宗のことで、成立は中国の天台大師・智顛によつて大成されました。この天台宗は、釈尊一代の教えを教判なさつて『法華経』を釈尊の出世本懐の經典とし、一念三千の円頓止観の法を修することによつて悟りに至ろうとしたのです。この教えを平安時代の日本に伝えたのが最澄上人です。そこに、密教と禅と菩薩

戒を加えて、さらに浄土教を融合させて日本天台を展開されました。これはいわば、一大総合仏教としての殿堂です。ここから鎌倉仏教の多くの祖師が輩出しました。親鸞聖人もそのお一人です。

今この御和讃では、最澄上人が、鎮護国家の法として「南無阿弥陀仏」を称えることを勧められていることを詠っておられます。聖徳太子から平安時代までの仏教は、日本国家のための仏教でした。平安時代の真つ只中に生きた最澄上人のご使命も、日本の国をいかに安んじるとかという点にありました。当時国を安んじるには、七難を避けることと考えら

れていました。七難とは、一つには「日月度を失う」、つまり日食・月食のこと。二つには「星宿度を失う」、これは彗星の出現で、古来天体の異変は不吉なことで考えられていました。三つには「災火」、四つには「雨水の難」、五つには「悪風」、六つには「日照り」、七つには「悪賊」。これらを合わせて「七難」といいました。

七難を消滅させる法として、最澄上人は「南無阿弥陀仏」というお念仏をあげられました。しかし親鸞聖人は、お念仏が七難を消滅させるだけにとどまらず、お念仏にすべてが収まっていくということを見て取られたのです。だからこそお釈迦さまは、お念仏の教えを説くためにこの世にお出ましになったという出世本懐を見ていくことができたのです。

### ◆夏の御文法要

左記日程の通り夏の御文法要を勤修いたします。

記

日時 六月二十三日～二十四日  
午後一時三十分から勤行

法話 京都教区山城第五組  
正蓮寺住職  
平原 晃宗 師

以上

### ◆門徒会総会のご案内

二〇一七年度天満別院門徒会総会を左記の日程にて開催致します。

記

日時 六月二十四日(土)  
午後四時

場所 天満別院一階講堂

門徒会会員の方々には、ご案内のお手紙を同封しております。ご確認の上、ご返送頂きますよう宜しくお願い致します。

### ◆三夜連続 法話の会

#### 開催のお知らせ

左記の通り、獅子吼の会による第十三回 三夜連続 法話の会が開催されます。

記

日時 七月三日(月)、四日(火)、五日(水)  
各日午後六時～午後八時まで  
会場 難波別院

※現在山門工事中のため、出入り口が南側に変更されています。

テーマ

『しんごいけれど…南無阿弥陀仏』  
現代を生きる私たちの諸課題に

お念仏はどう響くのか

講師 獅子吼の会 会員

参加費 入場無料

### 輪番雑感

『ここだけが 無辺の中の 現住所』

一日二十四時間、体の行動状態は行・住・座・臥の何れかである。心の動き、はたらきは煩惱具足の身、怒り、腹立ち、そねみ、ひまなく縁にふれてたえずおこる、煩惱の盛んなこと。そんな身をもって在るのはいつでもここだけしかない。このことが身の

現住所、だれとでもかわれない、わが身ひとりの存在。ここを今いただいている。賜っている。よくよくこのことを思うと何と不思議よりほかありません。まことにあること難い中にあらしめられているから、尊く有り難いことなのです。これがいのちをいただいている現実なのでしょう。

稀にいただいたここ、ここがいのち、その尊さに気づかず粗末にし、おろそかに過ごしています。そのことに中々目覚めないのがこの身です。仏の教えは、教えを聞くことによつて尊いこと、大切なことに少しも気づかない身であることを明らかに教えてくださいます。つまり教えを聞くよりほかに道はないということ。わが身のすがた、現住所がわかれば自と、どこに向かつていかなければならないか知らされる。

町の案内地図にその設置場所(現在地)が「ここ」と印がつけられています。目的地に行くにはどの道を選びよいかわかるのです。自分の現在居るところが明らかになれば目的地に到着できます。すなわち現在地(現住所)とはわが身の真相(しんのすがた)がわかるということだ。揭示伝導のことばをとおして知らされた。